

## 運動としてのコミュニティ・メディア

—アメリカ, イリノイ州, WRFU-LP とグローバルなネットワーク—

西川 麦子

### はじめに

この論文では、アメリカ合衆国中西部の地方都市にある低出力ラジオ局でのメディア実践をとおして、非営利組織が運営するコミュニティ・メディアの人と地域との関わり方や、そのグローバルな展開の可能性を探る。対象となるのは、イリノイ州のアーバナ (City of Urbana) にある Urbana Champaign Independent Media Center (UCIMC) と同組織が運営するコミュニティラジオ局 WRFU-LP である。筆者はここで、2011年4月より今日まで、アメリカと日本をオンラインでつなぐ日本語ラジオ番組を担当している。

アーバナとシャンペーン (City of Champaign) は東西に接し、両市にまたがってイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校がある。地域住民は、教職員を含む大学関係者の割合が高く、両市の人口が2010年人口統計では計122,305人<sup>1)</sup>、同年秋学期のイリノイ大学在籍者数が41,949人<sup>2)</sup>である。大学都市であり、毎年、人口の一定割合が転出入し、居住区域を基盤とした組織が脆弱という印象を受ける。こうした地域で、コミュニティラジオが、どのように住民と関わり活動しているのか。本稿では、コミュニティ・メディアを、「その地域に暮らす人々が、状況に応じて、人と場所と情報をつなぐ活動の手段」ととらえ、しかし、「そこから生まれるコミュニケーションやネットワークの展開は、必ずしも地域に限定されるものではない」という点を強調し、ハイパーローカルなメディアの特性と展開の可能性を論ずる。

### 1 “ハイパーローカル” な情報発信 —FCC 2011年報告書から

#### 1-1 激変するアメリカのメディア状況—ローカルメディアの衰退

アメリカ合衆国の連邦通信委員会 (Federal Communications Commission: FCC) は、2011年『コミュニティ

はどのような情報を求めているのか—ブロードバンド時代に变化するメディア風景 (The Information Needs of Communities: The Changing Media Landscape in a Broadband Age)』というタイトルの調査報告書を発行した (Waldman 2011)。インターネットを利用して、多くの人が大容量の情報を、迅速、安価に入手できる状況のなかで激変するアメリカのメディア状況をまとめている。464頁にわたる大部な報告書であり、新聞、ラジオ、テレビといったマスメディアのみならず、図書館や市民メディア、消費者の動向など、多岐にわたる内容である。アメリカにおけるコミュニティ・メディアについて考える際には、次の指摘が興味深い。つまり、従来の商業メディアにおける地方ニュースが衰退し、非営利メディアや個人による“ハイパーローカル”な情報発信が多彩に展開している、という点である。

この報告書によれば、マスメディアとはいっても、直面する状況は一律ではない。新聞の場合は広告収入が激減し、日刊紙のスタッフは大量に解雇された<sup>3)</sup>。テレビ、ラジオの視聴に関しては、一定数を維持し、ニューストークショーが人気をかくし、地方局は数のうえでは増えている。しかし、全国ネットで国内外のニュースは配信されていても、地方のニュース専門局や番組は減少し、低予算、人員不足のため、地域の問題を掘り起こし、健康、教育、地方行政といった住民にとって重要な問題の詳細を伝えることが難しくなっている。

商業メディアにおいて地方ニュースが手薄となる一方で、FCC 報告書のなかで注目されているのは、ハイパーローカルなレベルの非営利団体や市民による報道、情報発信である。ハイパーローカル (hyperlocal) とは、この報告書で繰り返し使われてるキーワードであり、まち (city) や地域、ブロックなどをさす。日本語でいう“地方”よりも小さな“地域”や、さらに小さな場所、などを指す。テクノロジーの発達によって、市民自らが身近な情報を収集し、ウェブサイト、ウィキ、LPFM (Low Power FM)、パブリック・テレビなど、多様な媒体を通じてボランティアで、特定の

地域に関する情報や限られた人々が関心をもつような情報を発信している。本論文が扱う低出力ラジオ(LPFM)は、FCC 報告書では、ハイパーローカルなレベルにおける、非営利メディアの1つとして扱われている。

### 1-2 LPFM—ハイパーローカルなコミュニティラジオの展開

アメリカ合衆国においてラジオからニュースを聴くという人の割合は大きく減少<sup>4)</sup>し、地方ニュースを伝える番組や放送は少なくなっている。それでもラジオは、人々の暮らしのなかに身近に存在している。2012年12月の Arbitron Inc. による調査<sup>5)</sup>では、アメリカの12歳以上の人口の69.2%、1億8111万8千人が、週に一度はラジオを聴く、という。

市民が発信する媒体としてのコミュニティラジオ局は、アメリカでは、第二次世界大戦後から、反戦平和運動などの組織団体が中心となり、数は少ないが設立されてきた。連邦通信委員会は、100ワット未満の低出力ラジオ(クラスD)を承認してきたが、1978年にこれを廃止した(Opel 2010: 3-4, 6-7)。その後は、非営利団体が運営するコミュニティラジオ局も、他の商業ラジオ局と同様、フルパワーの放送局として展開していった。その一方で、市民がよりアクセスしやすい低出力ラジオの認可を求める運動が続けられ、非合法的なマイクロラジオ活動が盛んになった<sup>6)</sup>。

2000年に連邦通信委員会は、ようやく、低出力ラジオ(Low Power FM, 下記 LPFM と記す)局を、都市部を除いて認めることになった。LPFM は、出力100ワット以下、アンテナの高さ100フィート(約30メートル)以下であり、電波が届く範囲は、平均すると3.5マイル(約5.6キロメートル)<sup>7)</sup>ほどである。個人や商業メディアは参入できない。LPFM 局は、フルパワーのラジオ局に比して、大きな資本がなくても開局、運営が可能であり、人々が公共の電波を利用して発信することができる貴重な媒体である。2001年に始まった開局申請受付は、2003年にはいったん打ち切れ、2012年6月30日現在では、全米に824のLPFM局が運営されている(FCC News, July 19, 2012)<sup>8)</sup>。

2000年以降は、都市部での開局認可を求めた運動が展開され、2010年12月、Local Community Radio Act 2010 法案が議会で可決され、翌年1月オバマ大統領が署名した。2012年12月4日付けの連邦通信委員会からの文書によると、2013年10月15日LPFMの申請受付が開始される予定である。2003年までのLPFM局

設立申請のうち6000あまりが今日に至るまで保留となっている(FCC 12-144: 2)。これに加え Local Community Radio Act により新たに認可されることになった都市部からの申請を加えると、厳しい審査をへて開局を許可されるラジオ局の数は限定されるとしても、LPFMのコミュニティラジオ局数はこれまでより大きく増えることが予想される。

すでに開局しているLPFMの組織、運営や放送内容は一様ではない。市民団体、教育機関、地方行政が関わるものから、宗教団体が運営する場合もある。地域住民にとっては、英語のみならず、非英語言語による重要な情報源になっている(Dunbar-Hester 2010, Waldman 2011: 184)。番組内容は、幅広いジャンルの音楽や、地域内外の時事的な問題、エスニック問題、アートなど多岐にわたる。非常事態においてもLPFMは活躍している。たとえば2005年のハリケーン・カトリーナの被災地において、既存のLPFM局や、簡易な装置を用いた臨時ラジオ局が、被災地で情報を送り続けた。都市部での開局を含め、市民が主体となるハイパーローカルな公共メディアとしてLPFM局の展開が今、まさに注目されている(Waldman 2011: 66-70)。

## 2 コミュニケーション・ツールとしてのラジオ番組

### 2-1 複合的メディア&アート・センター UCIMC とコミュニティラジオ局 WRFU

本稿で扱うWRFU、通称ラジオ・フリー・アーバナ<sup>9)</sup>は、イリノイ州、アーバナにあるUrbana-Champaign Independent Media Center (UCIMC)が運営する低出力コミュニティラジオ局である。上述した2011年のFCC報告書では、コミュニティ・メディア&アート・センターのなかで、他の活動と組み合わせてラジオ放送が行われている例として、WRFUがとりあげられている(Waldman: 184)。

UCIMCは、2000年に設立された<sup>10)</sup>。2005年にアーバナのダウンタウンの中心にある旧郵便局の重厚な歴史建造物(1914年建設)を買い取り、ここを拠点にしてさまざまな活動を展開している(西川 2012)。WRFUは、もともとはアーバナ・シャンペン社会主義者フォーラム(Urbana-Champaign Socialist Forum: UCSF)がLPFM局開設の申請を行い、連邦通信委員会から2003年に認可をえた。その後、UCSFとUCIMCが協議し、WRFUをUCIMCのプロジェクト



写真1：WRFU スタジオ，2012年8月

の1つとして運営していくことになった<sup>11)</sup>。

WRFU-LP104.5FMの放送は、2005年11月から始まった。UCIMCが現在の場所に移転した際に、関係者と住民が手作りでスタジオ(写真1)を作り、出力100ワットの通信アンテナを建てた。連邦通信委員会による規定ではアンテナの高さは100フィートまで認められているが、資金不足のため、とりあえず65フィートのアンテナをUCIMCの建物屋上に設置し、2005年11月に放送が始まった。アーバナを中心に半径4マイルほどは電波が届くが、シャンペーンでは、地理的、障害物などの条件によっては、明確に聞こえない場所が多かった。毎週7日間、毎日24時間、放送している。WRFUのメンバー<sup>12)</sup>が担当している番組(30分から2時間)が20ほどある。その他は、他局制作の番組も放送し、これらの番組がない時間帯は、地元アーティストの音楽を流している。竜巻発生など非常事態には、緊急放送へ切り替えられる。

WRFUの母体であるUCIMCは、地域社会、市民活動とメディアについて考えるうえで、2つの点から興味深い。

第1に、UCIMCが、アーバナ・シャンペーンの市民団体、活動のネットワークの1つの拠点となっていることである<sup>13)</sup>。コミュニティラジオ局運営をはじめUCIMCの組織のもとに、複数のプロジェクトが活動を展開している。たとえば、月刊ニュースレター*Public i*の発行、イリノイ州の刑務所へ本を送る運動、UCIMC建物内にある図書コーナーの管理や地元のZine(自費出版の小冊子、フリーペーパーなど)収集、パソコンなどの利用法を教える技術支援活動、電気部品などを用いた創作活動、ユニークな楽器制作、演奏などである。

UCIMCの建物には、大小多数のレンタルスペースがある。1階の正面入口から右側の一角は、アーバナの郵便局支局がUCIMCから場所を借りて営業してい

る。入口の左手ロビーに接してWRFUのスタジオがある。建物1階奥には、ホールが2つあり299名を収容可能である<sup>14)</sup>。2階と地下1階には、10数人から数10人を収容できる小規模なミーティングルームがある他、大小の部屋をUCIMCの協賛団体<sup>15)</sup>が事務所として、あるいは、地元アーティストがスタジオとして長期に借りている。これらのレンタルスペースでは、諸団体の集会、ワークショップ、演劇、コンサート、絵画などの展示、あるいは個人の結婚式や誕生日パーティなど、さまざまなイベントが開催されている。

第2に、UCIMCでの諸活動が、アーバナ・シャンペーンをこえた全米のネットワークとさまざまに連携していることである。UCIMCは、アメリカ合衆国と外国のIndependent Media CenterのネットワークIndymediaに参加している(西川2012:52)。またWRFUは、LPFMの法制化やコミュニティラジオの全米での普及を精力的にすすめてきたフィラデルフィアにあるプロメテウス・ラジオ・プロジェクト(Prometheus Radio Project)からの支援を受けて設立された(西川2012:52)。UCIMCの他のプロジェクトも、それぞれに地域外の個人、組織とつながり、州内外や全米から参加する会議やイベントもUCIMCでしばしば開催されている<sup>16)</sup>。

以上のように、UCIMCがダウントウンの中心に、大きな建物をえて存在することによって、地域で別々に活動をしている個人、団体が、時には有機的につながり、また地域外の広域のネットワークとも連携しやすい。UCIMCおよびWRFUについての調査研究をとおして、1つのコミュニティラジオ局についてだけでなく、アーバナ・シャンペーンにおけるさまざまな市民活動にふれ、それらを他地域との関係や、州や国家レベルの政策のなかで見えていくことができるのではないかと考えている。

## 2-2 Harukana Show—ハイパーローカルをつなぐ日本語ラジオ番組

私がUCIMCやコミュニティラジオの活動に関わる経緯については、西川2012で詳しく述べた。勤務校から在外研究の機会をえて、2010年9月から1年間、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校に研究員として所属した。アーバナのダウントウンに住み、近所にあったUCIMCの存在を知り、2010年10月に会員となった。

UCIMCは「誰でもがメディアになれる(become media)」とうたい、WRFUの集会を見学すると、「あ



なたも番組を担当できるよ」,「日本語番組でもいいよ」と気楽に声をかけられた。しかし,この地域には確たる日本人コミュニティがあるわけではない<sup>17)</sup>。私は英語も自由に使えず,ラジオ番組制作の経験もなく,属するコミュニティもない。このような状況のなかでコミュニティラジオをどのように利用することができるのか(西川 2012:56)。しかしながら,アーバナ・シャンペーンは,大学都市である。日本語学習者や日本文化に関心を寄せる学生や,日本研究者も多い。この地域には,仕事などで日本に長期に滞在した経験をもつ人々もいる。コミュニティラジオ局から日本語放送を始めてみれば,新参者の私でも,そこから地域や人と関わるきっかけとなるかもしれない,と考えるようになった<sup>18)</sup>。

2011年3月,WRFUの月例会議に新番組の企画を提出した。WRFUと日本をインターネットでつないだ生放送のトークショー,スタジオからの出演だけでなく,日本からもゲストを招く。技術的には,難しい企画ではない。WRFUのスタジオのパソコンと日本の出演者のパソコンをインターネットでつなぎ,Skype(インターネット・ビデオ通話サービス)を利用してトークをしていく。スタジオの声はマイクから,日本(あるいは他地)からの声はパソコンをとおしてスタジオのミキサーに入力される。これらの音声はUCIMC内のトランスミッターへ送られ,そこで周波数を調整し,送信アンテナから地域に発信される。放送後は,録音を編集して,番組のWebsiteにPodcastとして音声と説明文を添えてアップロードする。サイトには,世界どこからでもアクセスできる。

WRFUでは,国際的な番組制作の前例がなかったが<sup>19)</sup>,この企画を応援してくれた。「相手のパーソナリティが休暇に出かけたときに,番組ではスタジオで2人が話しているふりをして,スカイプ通話でトークをしたことがあったよ。海外とでも,多分,問題なく

接続できるはずだ。」と誰かが話した。UCIMCには,パソコンなど機材を扱う技術部門のプロジェクトがあり,そのメンバーたちもWRFUで番組を担当している。技術上の問題は,彼らに相談することができる。2011年4月からの日本語での新番組開始が承認された。

WRFUからの日本語番組を,Harukana Showと名づけた。Harukaは,「遙か」(遙かに離れた場所と人と情報をつなぐ)と,「春香」(春の香り,それぞれの場所の季節の匂い,人々の暮らしを伝える)の掛け詞である。番組制作においては,WRFUで他の番組を担当しているThomas Garza氏が機材担当を申し出てくれた。日本から2名に番組への協力をお願いした。一人は,「ひがしなだコミュニティメディア」(NPO)の運営に関わり,また多文化共生をテーマに調査研究をしている辻野理花氏,もう一人は,フリーペーパーや小冊子作成などとおして日本でDIY(Do It Yourself)活動を実践する立石尚史氏である。2人は,定期的にHarukana Showに出演し,自身の活動,関心について語り,日本のハイパーローカルなメディアの状況を,番組のなかで随時に伝えることになった。日本やアメリカからの出演者が,自身の体験や,各地のローカルな話題を繰り広げるというスタイルは,今日まで変わらない<sup>20)</sup>(論文末表1参照)。

2011年9月,私が在外研究期間をおえて,アメリカを離れる直前に,アーバナ・シャンペーン在住の日本人2人が番組スタッフに加わった。イリノイ大学大学院でメディア研究を専門とする小牧龍太氏と,イリノイ大学のJapan Houseで臨時職員として活動するLevy・野田・環氏,である(図1)。小牧氏が中心になってアーバナ・シャンペーンイベント情報を伝え,番組のなかで地域の話が増えた。Levy氏が,Japan Houseの活動を紹介し,それらに関わる学生や日本文化に関心をもつ大学院生らをHarukana Showへと誘い,スタジオはにぎやかになった。立石氏と辻野氏



図1 Harukana Show Staff 2012, WRFU-LP, 104.5FM  
\*UC: Urbana-Champaign, Illinois, USA

もスピーカーとして定期的に出演を続け、私は、米日の出演者間をつなぐホスト役として毎週、番組を企画、進行、Podcast 作成に携わっている。そして、2012年6月には、番組サイトが <http://harukanashow.org/> へ移転、一新した<sup>21)</sup>。

2013年2月22日に Harukana Show は100回目を迎えた。この間、約50名がゲスト出演した。異なる立場の人々（アメリカ合衆国からは、在米日本人、日系アメリカ人、日本語学習中のイリノイ大学学生、教職員、日本文化研究者、高校生、NPO 職員、メディア&アート・センター関係者、日本での英語教師経験者、訪米中の学生、僧侶、弁護士、図書館司書など、日本からは、大学教職員、学生、小学校の日本語補助教員、コミュニティラジオ関係者、旅行会社勤務、商店主、映画監督、ミュージシャンなど）が、いろいろな場所（アーバナ・シャンペーン、シカゴ、京都、神戸、東京など）から番組に参加した。さまざまな人々との会話は、ある種の多文化接触であり、そこから垣間みる相違や気づきや共感が、Harukana Show のひとつの特色となっている<sup>22)</sup>。

本研究におけるメディア実践とは、以上のように、コミュニティラジオという公共メディアを利用して、情報を収集、発信しながら、そこで生じる多様なコミュニケーションの過程に立ち会っていくことである。続く章では、こうしたメディア実践とコミュニティ・メディアに関するアーバナ・シャンペーンでの現地調査とを組み合わせ、UCIMC や WRFU のハイパーローカルなメディアとしての特色と地域との関わり方をとらえていく。

### 3 運動としてのコミュニティ・メディア —非営利メディアの連携

#### 3-1 市民運動から生まれたアメリカの LPFM と WRFU 開局

2012年夏の現地調査では、私は、グラスルーツ・ラジオ集会 (Grassroots Radio Conference) への参加に合わせて渡米した。この会議は、1996年から毎年会場を変えて開催されており、全米からコミュニティラジオ関係者が集まる。2012年は、アーバナ・シャンペーンの UCIMC が会場となり、7月26日から29日まで4日間にわたって、80を越すセッションやイベントが実施された。そのなかには、Local Community Radio Act による新たな LPFM 局申請の受付開始をにらんだワークショップも含まれている。私は、“Radio Space: Us-

ing Community Radio to Link Individuals in an Expanding World” というセッションを企画し、Harukana Show のスタッフとともに参加した<sup>23)</sup>。ラジオを含むコミュニティラジオと電話やインターネットを組み合わせ、特定の地域を拠点としながらも同時に他地域や世界とつながる多文化・多言語放送の可能性を問う、という趣旨である。

セッションのなかで、都市圏において1970年代から放送を開始しているフルパワーのコミュニティラジオ局の関係者から、こんな内容のコメントをもらった。「私たちのコミュニティラジオ局では番組を担当したいという希望者が多く、局としては、リスナーにとってのニーズやターゲット層を考え番組を選定せざるをえない。このセッションで紹介されたような新しい私たちの番組を始めることは容易ではない。」

WRFU は、一週間の番組スケジュールに新番組を組み込む時間的余地があり、Harukana Show のように、リスナーが少ない日本語での番組制作を試みることができた。同じコミュニティラジオと称する場合も、フルパワーであるかローパワーであるかによっても、あるいはそれぞれの地域、ラジオ局が抱える事情によっても、環境が大きく異なることを、グラスルーツ・ラジオ集会への参加をとおして気づいた。では、WRFU は、他局とは違うどのような事情、特徴があるのだろうか。

グラスルーツ・ラジオ集会が終わったあとで、運営委員の中心メンバーである Danielle Chynoweth 氏に、Harukana Show への出演をお願いした。Chynoweth 氏は、2000年の UCIMC 設立メンバーの一人であり、2005年の WRFU 開局にも深く関わった。2012年現在は、プロメテウス・ラジオ・プロジェクトのディレクターの一人でもある。Chynoweth 氏はまた、2001年から2008年まで、アーバナの市議会議員をつとめ、その後も、アーバナ・シャンペーンにおいて、公共機関におけるブロードバンド化の実現をめざす行政とイリノイ大学の共同プロジェクトをすすめてきた<sup>24)</sup>。

コミュニティラジオの普及に深く関わり同時に地域の最新の情報通信システムづくりを推進する Chynoweth 氏へ尋ねたいことが2つあった。第1点は、WRFU は、他のコミュニティラジオ局とどのように違うのか。アーバナ・シャンペーンには、商業ベースのラジオ局の他に、イリノイ大学のキャンパスには、教育目的の複数のラジオ局があり、そして30年以上の歴史をもつ NPO のコミュニティラジオ局 WEFT90.1 FM<sup>25)</sup> がシャンペーンのダウントウンにある。第2点

は、インターネットの時代、ラジオという媒体は時代遅れではないか。とくに若い世代は、ラジオやテレビからよりも、インターネットから情報を集める。現代においてコミュニティラジオがメディアとして、どのような意味をもつのだろうか、という問いである。

2012年8月17日、Chynoweth氏への番組でのインタビューは、Harukana Showの第73回Podcastに小牧氏による日本語通訳の音声とともに掲載し、トークの英文も添付している。下記では、Chynoweth氏の話の一部を紹介する。興味深かったのは、低出力ラジオ局としてのWRFUの特色について尋ねた際に、彼女がコミュニティラジオをめぐるアメリカ合衆国の市民運動の歴史から話し始めたことである。

「まずは、合衆国のコミュニティラジオの歴史についてふれておきます。アメリカにラジオが誕生したとき、政府は、この新しい技術、通信手段を企業に渡してしまいます。その他は、そうとうなラジオ好きが趣味で開いた極小のラジオ局か、学校内の教育ラジオ局が多少、あるくらいでした。最初のコミュニティラジオは、第1次、第2次世界大戦後の反戦運動、Pacifica Network（反戦平和運動のネットワーク）の活動のなかから生まれました。広告をとらず、リスナーからの寄付、支援によって運営されました。これが、先例となり、60年代、70年代初めの公民権運動や反ベトナム戦争運動においてメディアの重要性が認識され、公共のメディアへのアクセスを市民の権利として求めるようになりました。70年代、80年代にはこうした運動の一環として、いくつかのラジオ局が開局しました。それからBlack College Radioやエスニックラジオ局も生まれました。

こうしてフルパワーのコミュニティラジオ局が開設されたものの、ラジオ放送のほとんどは、企業が独占し、コミュニティラジオが発信する余地はわずかでした。活動家たちは、連邦通信委員会に新たに低出力の放送ができるように働きかけてきました。海賊ラジオの活動も含めてさまざまな運動を展開し、ようやく2000年に、連邦通信委員会は人口密度が多くない地域での低出力ラジオ局を認めることになりました。その後も、都市部でのLPFM認可を求め続け10年にわたる闘争が繰り広げられ、Local Community Radio Actの成立に至ったのです。」

商業メディアがラジオ放送を独占するなかで、自分たちのメディアを確保しようとして、市民運動のなか

からフルパワーのコミュニティラジオが設立された。その一方で、活動家たちによる、政府と商業メディアとの闘いと交渉が続き、LPFMが合法的に開局できるようになった。アメリカ合衆国において低出力ラジオは、長きにわたる運動の結果、市民が獲得したメディアである。

しかしながら、アーバナ・シャンペーンには、すでにWEFTというコミュニティラジオ局がある。10,000ワットの出力をもち、NPOの放送局であるが他の商業ラジオと同様、広域に番組を放送することができる。2000年から低出力ラジオ局が認められるようになったからといって、同地域にすでに老舗のコミュニティラジオ局があるのに、どうして、さらに、出力100ワットの小さなラジオ局を作るようになったのだろうか。

「低出力ラジオ局であるWRFUは、WEFTのように1970年代に活動を始めて現在はフルパワーの出力をもつコミュニティラジオ局とは、役割が異なります。WRFUは、ニッチ(niche)とでもいいでしょうか。何が違うのか。まずは、コストです。フルパワー・ラジオ局を運営するには、低出力ラジオ局の10倍の経費がかかります。より多くの支援やスポンサーをえて運営していくためには、より多くのオーディエンスを獲得するために標準的な番組づくりとなります。一方、低出力ラジオ局は、それほどのコストがかからないので、たとえば、聴取者が少ない言語による放送もできます。低出力ラジオ局には、それまで公共の電波にアクセスすることが難しいとされた小さなコミュニティでもラジオ活動に参加できるのです。

WRFUを設立した仲間は、それまでにWEFTの活動に参加していました。素晴らしいラジオ局ですが、ただ、WEFTには、ラジオ番組づくりに関わりたいという人たちの、多種多様なアイデアを活かす番組を作るのには向いていません。ジャズやブルースや世界のビート音楽、といったWEFTのラジオ番組の他に、雑多な番組を加える余地はありませんでした。もう1つ別のコミュニティラジオが必要だと考えました。そこに、プロメテウス・ラジオ・プロジェクトがボンコツカーにのってこの町にやってきて、『その時が来た!』と知らせてくれたのです。

プロメテウス・ラジオ・プロジェクトの設立者の一人でもあるPete Tridishが、責任をもって私たちを助けてくれました。連邦通信委員会への申請手続きは実に厄介で、難しい。というよりも、官僚主義的です。プロメテウス・ラジオ・プロジェクトの支援のおかげ



で無事に手続きができ、開局が認可されました。スタジオを作る際にも、ヒモの結び方から、タワーの建て方まで、丁寧に教えてくれました。スタジオにその時の写真がはってあります。子供たちも、スタジオのCD 棚作りを手伝ってくれました。]

低出力ラジオ局はフルパワーのラジオ局とは違い、「ニッチ」だと Chynoweth 氏という。本稿1で言及した FCC2011 の報告書でいう「ハイパーローカルなメディア」だが、ここでは、地域限定という意味だけでなく、小さいながら関心やこだわりがあるというニュアンスを含む。Chynoweth 氏の話の文脈のなかでは、LPFM というニッチなラジオ局は、住民の多様なニーズに対応しうる、フルパワー・ラジオ局の間隙をぬうような存在である。しかし、インターネットの時代に、ニッチで地域限定のコミュニティラジオは、やはり時代遅れではないか。

「そうですね。テレビが登場したときも、ラジオは終わりだと言われましたが、そうではなかった。インターネットが登場したときも、これでテレビは死んだと言われました。しかし、事実はちがった。ラジオは、アクセスしやすいメディアです。車のなかや仕事をしながら聞くことができます。コミュニティラジオ局からの放送では、その声がどこの誰なのかを人々は知っています。コミュニティラジオを聞いていると、リスナーは自分もそこに居合わせているような感じがします。このスタジオで、今、こうやって4人が一緒にいて会話をしていますが、インターネットでは、こんなふうに関わり合う必要はありません。インターネットでは、それぞれがチャンネルをもっているようなものです。しかし地域とつながるコミュニティラジオもこれからは、インターネットを利用し、ユーストリームなどを組み合わせ、アーカイブにも残すなどして、よりグローバルにオーディエンスを獲得していくこともできます。

コミュニティラジオは地域について放送ができる数少ないメディアであり、かつ、Harukana Show のように地域や国のバウンダリーをこえて、多言語で、国際的につなぐこともできます。商業的な利益を抜きにして、他のコミュニティと接することで、自分のコミュニティを意識することになります。コミュニティ・メディアは、ラジオであれ、インターネットもビデオでも、商業的な利害関係なく、直接に会話を始めることができます。コミュニティラジオの目的は、ラジオに

あるのではなくて、コミュニティが主体です。コミュニティについての情報を扱うメディアは多くありませんが、コミュニティラジオはそれを提供することができるのです。]

非営利の小さなメディアや個人のジャーナリズムは、その1つ1つが直接に与える影響力は小さいかもしれないが、その時々その場所での状況や、多様な住民の声に細やかに対応することが可能である。また、自社の利益追求を優先せざるをえないマスメディアとはちがいで、非商業メディアは、場所や組織の単位をこえて協力しやすい。小さなメディア間のつながりは、FCC 2011 の報告書でふれているような、ブロードバンド時代における、ハイパーローカルなメディアの展開をみていくうえで重要な側面である。インターネットなどを利用した瞬時の情報伝達や異なる場所での運動の連鎖は社会現象として注目されやすいが、無数のニッチなメディアが連携する背景として、地域のなかで培われた対面的な関係や時間をかけて形成された広域の関係も見ていく必要がある。

WRFU の設立も、WEFT という別のコミュニティラジオが、地域メディアとしての基礎を築いてきたことによって、それとは異なる機能をもつ、多様な住民の声に応じるより小さなラジオ局の誕生を可能にした。WRFU の番組制作の手引きである『Airshifter Handbook』の一部は、WEFT の『ボランティア・ハンドブック』を参照に作成されている。WRFU のスタジオの手作りの棚にびっしりと並ぶCDは、その多くはWEFT から寄贈されたものである。また、WRFU の設立、開局は、アーバナから遠く離れたフィラデルフィアにあるプロメテウス・ラジオ・プロジェクトからの支援があって実現しえた。これから3-2でみていくように、WEFT やプロメテウス・ラジオ・プロジェクトとの協力関係は、2012年現在も続いている。

### 3-2 タワー・プロジェクト—運動の場としてのコミュニティ

2012年夏には、UCIMC は、Grassroots Radio Conference を開催しただけでなく、送信アンテナ塔を65フィートから100フィートへと建て替えるタワー・プロジェクトが進行していた。総額20,000ドルの費用がかかるが、長年かけて数百人からの寄付が集まった(Chynoweth 2013)。新しい送信アンテナ塔によって、聴取範囲が半径4マイル(約6.4 km)から6.5マイル(約10.4 km)まで拡大される。場所によってはさら

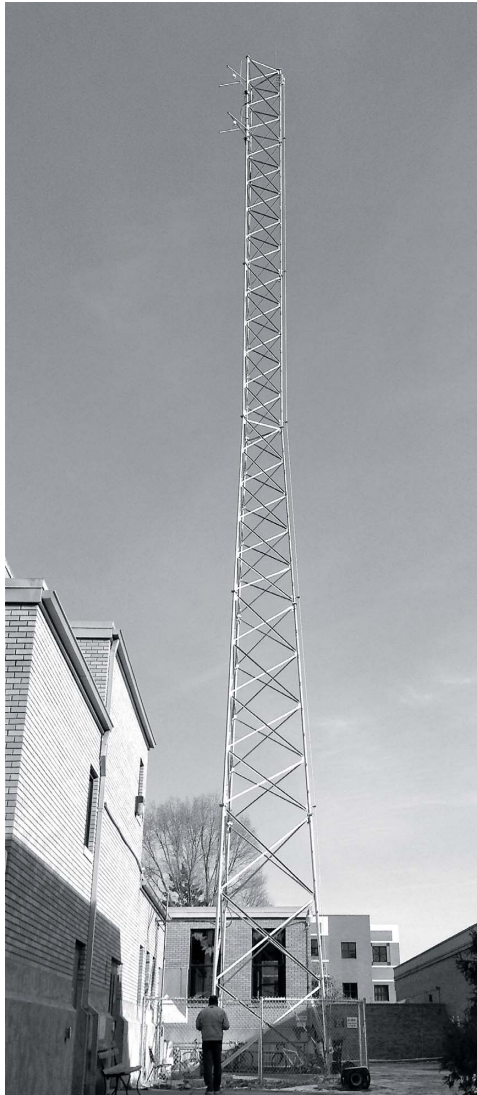


写真2 「WRFU の100フィートのタワー」  
(2012年12月撮影) と「必要な物リスト」

「buckets—a few, bungee cords, cement mixing tray, cement trowels, chain fence stretcher, clamps, concrete boots, concrete saw, concrete tools-concrete vibrator, corded circular saw, drill bits of all types, wood, concrete, metal—including long ones for the walls, dust masks, earth compaction machine, extension cords, extension ladder, extra lights—at least 4 or 5, any kind of lamps will do., fire extinguisher, first aid kit, fork lift- at least 5000 pound capacity (yeah, we know you have a forklift lying around somewhere!), framing square, goggles, grinder for cutting metal, halogen lights, hammer drill, hearing protector, heavy dolly, impact wrench, cordless, jigsaw, ladders, many extension cords, probably 5 of the cheap \$3 little ones and 4 or 5 of the heavy duty ones, mechanics box wrenches, adjustable (crescent) wrenches, ratchets, and, sockets—including some pretty large ones, metal chopsaw, padlocks and chains for materials and equipment left outdoors, picks, post-hole digger, power strips- at least 4 of them, more may help, prybars, pulley that works with the size rope we have, rebar bending machine, rope- some small pieces, plus 250 feet of preferably 1/2 inch or perhaps, 3/8 rope, saw horses, sawzall, shop vacuum, shovels, sledge hammer, spud wrench, table or two for plans and tools, tape measures, tarps, torque wrench, trash cans」(2012年10月29日 WRFU メール)

に遠方まで WRUF104.5FM を聴くことができるようになる。100フィートのタワーは、関係者にとっては、2005年に WRFU が開局した時からの目標だった。2011年にはタウンホールでの公聴会をへて市議会からも許可をえた。WRFU 開局7周年となる2012年11月、UCIMC に新アンテナが運びこまれ、電波塔建設の工事が始まった。その一部始終は、連日、WRFU からのメールでアナウンスされ、作業への参加が呼びかけられた。自分たちで資金を調達するだけでなく、地面に穴を掘り、アンテナを100フィートの高さに組み立てていく。今回も、プロメテウス・ラジオ・プロジェクトから Pete Tridish 氏がアーバナにやってきて作業を指導した。彼は、建設エンジニアの経験もち、現在は資格をもった放送エンジニアである。また、シャンペーンの WEFT の創設者の一人である、Bill Taylor 氏も WRFU の新タワー建設にボランティアとして駆けつけた。彼もまた、長年のラジオ・アクティヴィストである (Merli 2013)

2012年10月29日配信の WRFU から会員へのメールには、タワー・プロジェクト開始のお知らせと、これから調達する必要がある60にもおよぶ物品リスト(写真2)が記され、ボランティアを募集している。5日後の11月3日のメールでは、すでに多くの道具については、貸出、寄贈の申し出があったと報告され、まだ調達できていない残り10ほどの物品リストがあげられている。そして、11月5日には UCIMC にタワーが到着し、建設作業を開始するという次のようなメールが配信された。

「重さ3900ポンド、高さ100フィートのタワーが到着!!! いよいよ建設開始。11月5日現在、9名のボランティアが参加を申し込んでいます。さらに、来週の作業参加者を募集しています。毎日、午前8時から12時、午後1時半から6時半です」といった告知とともに、作業にともなう服装などについて細かな説明が記載されている。「よそゆきの服は着てこないで」「作業しているうちに暑くなるので、一枚ずつ脱げるような重ね着を」「準備運動をすること」「耳栓、ゴーグルのご用意を」「道具持参の場合は名前を記してください」など、現場に即したアドバイスが記されている。

作業が開始されてからも、進行状況が随時に知らされる。「皆さん、塔を建てるために地面の掘削を始めましたが、配水管があるために、その周囲は手で掘らなければなりません。今、Pete が掘っていますが、誰か手伝ってくれませんか。今夜の WRFU の会議の前に、もし1時間でも30分でも早く来られる人がいた



ら、ぜひ、お願いします。ブーツとコートと、そしてシャベルもあれば持ってきて下さい。なくても大丈夫です、とにかく来てください。」(11月6日)

30メートルの送信アンテナ塔が建った後も、行政の検査のなかで避雷システムの改良要請があり、これに対応するために、11月26日から12月6日まで WRFU からの放送が停止となった。その後の試験期間をへて、新しいタワーからの放送が正式に始まったのは、12月中旬のことである。12月12日のメールでは、WRFU から新タワーからの放送開始が知らされた。

「長年の努力の末、我々のラジオ塔が建設され、聴取エリアは2倍になりました。アーバナ・シャンペンの全域、さらにはサボイ (Savoy) まで電波が届きます。ラジオ局の再スタートです。ダイヤルを 104.5 FM に合わせて、この新しい放送がどのように聞こえるか試してみてください。」「WRFU 新タワーのお祝いを、12月13日午後5時半から6時半まで IMC のメイン広場で行います。Pete Tridish は、6週間、根気強く作業を続けました。明日、この町での滞在を終えます。彼に、大きな感謝を！ そして、何百人のボランティア、資金調達者、寄贈者のおかげで、タワーができたことに謝意を表します。この6週間のボランティアの支援は、驚くべきものでした。腕まくりをして参加してくれた全ての人たちに心から感謝します。明日も1日じゅう作業は続きますので、立ち寄れる方はご一報を。」

最後に電波塔の周囲に柵を取り付ける作業が、12月18日に行われた。

「皆さん、明日の火曜日の正午にタワーのフェンスを仕上げる集まりがあります。フェンスを引っ張って伸ばすのに人手がいます。半時間とかからないと思います。クリスマスのボーナスだと思って、手伝いに来てください」(12月17日 WRFU メール)

タワー・プロジェクトを一部の関係者や業者に任せるとはせず、より多くの参加を求め、「自分たち」の手で作業をした、という痕跡を残す。実際には、ウィークデーの日中に作業に参加できる人は限られている。冬の始まりの冷たい雨が降る日に、熱いメールを受け取っても多くの人は動かない。タワー・プロジェクトにしてもグラスルーツ・ラジオ集会にしても、どのように関わるかは、あくまでも個人の自主的な判断であり、WRFU や UCIMC のメンバーだからといって暗に作業参加を強要されることはない。それでも連日、WRFU からのメールのなかでタワー建設の進行状況が細かく、快活に伝えられると、どんな様子なのだろう

うかと気になり、参加してみようかと考えた人もいただろう。実際に25名のボランティアが集まった (Merli 2013)。そして、活動のプロセスを会員間のメールで随時に伝えていくことで、建設現場での参加者だけでなく、より多くの人々の関心を引き寄せることになる。

WRFU のメンバーは、普段から結束が強いわけではない。自分たちが担当するラジオ番組にはこだわりがあるが、他の番組への関心は薄く、毎月の定例集会以外に WRFU の会員どうしが接する機会は少ない。それでも、グラスルーツ・ラジオ集会や行政と交渉する必要があるタワー・プロジェクトなどでは、その目的に応じて、UCIMC の関係諸プロジェクト、団体から人が集まり協同して動く。大きなイベントや対外的な交渉を要する際には、Chynoweth 氏のように UCIMC 内外、地域、地域外で活動実績をもつ人物が、采配をふるい人や組織をまとめていく。

こうした UCIMC や WRFU の活動を、メディアとネットワーク形成という側面から考えるうえで、小牧氏が89回 Harukana Show (後述) のなかでも紹介しているクレイ・シャーキー『みんな集まれ！ ネットワークが世界を動かす [Here Comes Everybody: The Power of Organizing Without Organization]』(2010 [2008]) の論説は、参考になる。この本でシャーキーは、ダンカン・ワッツとステイヴン・ストロガッツが1998年に発表した「スモールワールド・ネットワーク」を参照し、ソーシャルツールがスモールワールドパターンに依存し、それを拡張していると論じている。スモールワールド・ネットワークにおいても、人々がアトランダムにつながるのではなく、同じ人々と頻繁にやりとりを重ねる。こうした小さなネットワークが相互に接続することで、大きなネットワークが形成されていく。大きなネットワークの内部は、多数の緊密なサブネットワークがつながり、その全体の構造を維持するためには、多くのつながりもつ個人が果たす役割が重要になる。ソーシャルツールは、それ自体が人間の代わりに社会的選択をするというよりも、人間が、そのツールを使って関係や接続の選択の可能性を広げようとするときに効果を発する (シャーキー 2010: 213-233)。

UCIMC は、集団や地域への強い帰属意識を求めるというよりは、さまざまな取り組み、活動、主張を他の人々にも見えやすいかたちで表現し、社会との関わりなかで考え、発言するメディア利用の方法を共有していく、運動の場としてのコミュニティを目指しているのではないかと思う。その手段の1つとしてコミュ

ニティラジオがあり、100フィートの電波塔は、長年プロジェクトに携わってきた人々にとっては、活動の成果が目に見える形となったシンボルでもある。

#### 4 WRFU と地域の関わり方 —リスナーとともに学ぶ

新しい塔のおかげで WRFU からの放送の聴取範囲が拡大された。しかし、だからといって、すぐにリスナーが増えるわけではない。WRFU の番組は「スポーツと政治」「ネイティブ・アメリカン」「移民」「環境と食」など、必ずしも多くの人々が関心をもつテーマではない。実際のところ、WRFU は、コミュニティラジオとして、どのように地域と関わり、住民に利用されているのだろうか。

2012年8月に、私が米国滞在中に、WRFU の移民問題を扱う番組のなかでしばしば話題として取り上げられていたのが、DACA (Deferred Action for Childhood Arrival) である。幼少時に親とともにアメリカに不法入国し、「国外退去処分になりうる若者にたいして、一定条件を満たせば国外退去処分を一時的に延期し、その間就労許可証を与える措置」(大蔵 2012) を、オバマ大統領が2012年6月15日に発表し、8月15日から申請受付が開始された(内畑 2012)。

アーバナ・シャンペーンにも、アメリカ合衆国にとっての不法滞在者が多数いる。その子供たちのなかには、出身国には馴染みがなく、非合法にアメリカに住んでいることを認識しないまま育ち、就学している場合もある。就労許可証はなく、パスポートも、正式に自動車運転免許も取得できず、医療、教育、就職などさまざまな場面で深刻な支障をきたし、警察による時には差別的な取り締まりを受けるなど困難が生じやすい。DACA について、まずは対象となりうる人々に正確な情報を届けることが重要である。しかし、不法滞在者に公的に情報を伝えることは難しい。

ラジオは、見えにくいマイノリティに情報を届ける手段の1つである。WRFU にも、英語以外にスペイン語番組が複数ある。そのうちの1つ、Triple R<sup>26)</sup> は、スペイン語で3つのR、リズム、レジスタンス、民族を意味する。アーバナ・シャンペーンでは、マイノリティのなかでも人口が多い<sup>27)</sup> ヒスパニック系の人々、とくにラテンアメリカからの移民、ラティーノと呼ばれる人々を対象としたスペイン語と英語による番組である。毎週月曜日夜7時から9時までの2時間、移民が直面する問題、政治、メディアなどについて語り合

い、ラテンアメリカ系の音楽を流す。Harukana Show では機材を担当する Garza 氏が、Triple R の番組づくりに長年関わっている。Garza 氏の案内で、8月後半、Triple R や DACA に関する地域での活動を見学した。

2012年8月13日(月)の Triple R では、夏休みのあいだチリに帰国していたイリノイ大学の大学院生が出演した。チリでの地震などの災害時におけるコミュニティラジオの重要性について話し、この日のスタジオ見学者である私もトークに加わった。Garza 氏の案内で、翌日から、Champaign Urbana Immigration Forum (以下、移民フォーラムと記す) の DACA をめぐる活動、集会を見学した。移民フォーラムは、シャンペーン・アーバナで移民問題に取り組む団体間の情報交換と連携をはかるために、2011年に結成された。2012年8月14日(火)に University YMCA で行われたミーティングでは、イリノイ大学教職員や学生、高校職員、会計士、弁護士、宗教団体関係者など、10名ほどが出席していた。すぐに申請が始まる DACA について、該当者が適切な情報を得るための説明、相談会の実施を予定している。

まずは、相談員となるボランティアを募り、講習会を開いて DACA の申請条件、手続き<sup>28)</sup> について学ぶ。同時に DACA 説明・相談会の開催を、対象となりうる地域の人々に知らせる。とりあえずは、移民フォーラムに参加している諸団体が、それぞれのサイトやメーリングリストから情報を伝えていく。しかし、こうした団体と関わりがない人々に、どのように DACA についてや申請に関する支援活動について知ってもらうのか。話し合いのなかで、こんな声があがった。

「ラジオでも情報を流したら？」

「それなら、WRFU の番組でも、DACA について伝えることができるよ。」

「WRFU って？」

「アーバナにあるコミュニティラジオ局だよ。」

「番組を担当しているの？じゃあ、そこでの広報、お願いね。」

移民フォーラムの会合から2日後、2012年8月16日(木)に、シャンペーンから北西へ、車で1時間あまり走ったブルーミントン (Bloomington) で、この都市の移民プロジェクトによって、DACA についての相談会が開催された。移民フォーラムのメンバーが見学へいくというので、私も YMCA の Executive Director の Mike Doyle 氏に同行させてもらった。教会で開催され、移民プロジェクトの関係者が、DACA につい

て資料を配付し英語とスペイン語で説明した。参加者は50人あまり、高校生らしき若者も多い。1時間の説明と質疑応答が終わったあとも、参加者たちが主催者を取り囲み質問が続いていた。

シャンペーンへ戻る道中で、車を運転中の Doyle 氏に DACA について気になる点を尋ねた。「DACA は、申請者は一定期間の在留資格をえることはできても、不法滞在しているその親や親戚たちに影響を及ぼさないか」、「国外強制退去が2年は延長されたとしても、その後はどうなるのか。今後、政権が変わり、政府の方針が変われば、DACA 申請者が後に、一斉、国外退去を迫られないだろうか。」

将来のことは、誰も答えられない。移民フォーラムが企画しているのは、DACA の申請該当者が、この措置についてきちんとした情報える窓口を用意すること、本人が理解したうえで申請を希望する場合には、その手続きについての相談を受け、可能な支援を行うために専門家を含む人的な体制を整えておくことである。Doyle 氏からの答は、そのような内容だった。移民フォーラムの活動では、当事者に情報を届け、申請希望者の相談を受け、必要があれば弁護士など専門家につなぐ。すでに DACA の申請は始まっており、相談ボランティアの養成を急ぐ必要があった。

翌週、8月20日(月)の Triple R では、2時間の番組の前半では、米国移民帰化局 (US CIS: U. S. Citizenship and Immigration Service) のウェブサイトに掲載されている DACA のガイダンス (Consideration of Deferred Action for Childhood Arrival Process) をもとに DACA の内容と申請条件を説明した。番組の担当者は DACA についての専門家ではない。行政文書は時には、難解である。番組では、解説するというよりも、行政の文書に疑問をはさみながら読み、リスナーとともに個々の問題点を考える。番組の後半では、移民フォーラムのメンバーが WRFU のスタジオを訪れ、8月29日(水)にアーバナ高校で開催予定の「DACA 申請の説明・相談会」(Deferred Action Information for the Public Event) について案内し、参加を呼びかけた。番組の担当者は、番組の前半で扱った、DACA についての行政ガイダンスでは分かりにくかった点などを、ゲストに尋ねながらトークをすすめていた。

DACA の話題だけに2時間をかけるラジオ番組は、稀であろう。しかし、どれほどの時間を費やしても、WRFU104.5FM からのラジオ放送を聴く人が少なければ「効果」はないかもしれない。移民問題を扱う諸団体の関係者のあいだでさえアーバナにある小さなコミュ

ニティラジオ局は知られていなかった。ましてや一般の人々が、Triple R という社会、政治問題を扱う番組を普段から聴いているとは考えにくい。それでも、番組担当者は、できる範囲で情報を集めその問題について学習し、関係者を招き、トークをしながら知識を蓄積していく。素人だからこそ、何が難しいのか、どんな情報、解説が必要なのかを、一般住民の立場にたって考えていくことができる。「リスナーとともに学ぶ (Learning with Listener)」, Garza 氏が、自分たちの番組について説明した際に、表現した言葉である。

この後、8月21日(火)と27日(月)には、移民フォーラムが主催して、DACA ボランティア・トレーニング・セミナーが、シャンペーンのパークランド・カレッジと YMCA で開催された。それぞれ30人、50人ほどのボランティア希望者が参加した。フォーラムの関係者が、DACA の内容、申請書類、手続きについて説明した。21日の集会で不足していた点は、27日の講習会で説明を加えた。集会を重ねるほどに、議論が深まり、説明が明確になった。

アーバナ・シャンペーンでの「DACA 申請の説明・相談会」は、8月29日以後は、移民フォーラムが主催して、9月8日(土)にパークランド・カレッジで、11月8日(木)にアーバナ・フリー・ライブラリーで開催された。その他にも、シャンペーン・パブリック・ライブラリー、コミュニティ・センターなどでも、同様のイベントが開催された。しかし、主催者や名目が変わると、1つの組織のウェブサイトには別の組織によるイベントについては案内が掲載されない場合が多い。Triple R では、いろいろな市民団体からの情報を集め、その都度、番組で知らせた。毎週2時間という番組枠があることによって、その時々状況に合わせた情報を、丁寧に伝えていくことができる。また、ラジオから発信するだけでなく、番組関係者が DACA をめぐる集会にボランティアの相談員として参加し、その経験が番組のなかでも具体的な情報として反映されていく。

WRFU からのラジオ「放送」が、自動的に人、情報、場所をつなぐわけではない。DACA をめぐる活動のなかで見てきたように、番組に関わる人々の地域における活動やそこで築いてきたつながりが、住民にコミュニティラジオの存在を知らせ、地道に関心を引き寄せる。また、地域のさまざまな立場にある人々が、公共のメディアを使って情報を伝え、考えを表現することができることを実際の放送をとおして示していくことになる。そして、ラジオ局のスタジオという物理



的な場所があることによって、住民が立ち寄り、集まり、顔を合わせることができる。メディアと場所と人との距離の近さが、コミュニティラジオの息づかいである。

## 5 小さなメディアとネットワーキング —一人がメディアを使う

コミュニティラジオは、地域住民の生の声を伝えることができる数少ないメディアであり、かつさまざまな地域や国の境界をこえて場所と人と情報をつなぐ可能性をもつ。3-1で Chynoweth 氏が述べていたように、他のコミュニティと接することで自分のコミュニティを意識することになる。ラジオ番組のなかでのトークは、リスナーという顔が見えない他者を意識しているが、Harukana Show のように、世界の異なる場所をつなぎ伝え合おうとするときに、改めて自分がいる場所を発見し自分たちの暮らしについて考え始める(西川 2013)。

第89回の放送(2012年12月7日)では、Harukana Show の年末座談会<sup>29)</sup>と称し、「ハイパーローカル」をテーマにとりあげた。番組スタッフが各自のメディア活動を振り返りながら、それぞれの場所での小さなメディアの展開をどのように見ているかを話す企画であった(Harukana Show Podcast No. 89)。

立石氏は、トークのなかで、クリス・アンダーソンの近著『MAKERS』(2012)と「ロングテール」理論<sup>30)</sup>についてふれ次のように指摘している。「フリーペーパーやミニコミ誌のようなハイパーローカルなメディアは、日本においてこれまでも長く存在していたが、そうした小さなメディアによる発信が、インターネットによって発見され注目されやすくなった。また、小さな枠組の発信どうしが以前より結びつきやすくなったが、大きなメディアの枠組は変わらず、その『中間』が見えにくくなっている気がする。」と指摘している<sup>31)</sup>。

辻野氏は、神戸市東灘区を拠点として活動する「ひがしなだコミュニティメディア」について話した。この地域では、1995年の阪神淡路大震災からの復興をへて地域の住民層が変化し、新旧、異なる世代の住民間の交流が少ない。こうした状況を改善するために、さまざまな住民のあいだをつなぐ仕掛けづくりを、「つなみ(到達予測)ラインウォーク」などのイベントや MEDIA ROCCO などのメディア活動をとおして行ってきた。

日本から出演した立石氏が言及した「ロングテール」理論や、辻野氏がふれたソーシャルメディアを駆使した商店街の活性化<sup>32)</sup>についての話題を受けて、WRFU のスタジオから出演した小牧氏は、番組のなかでアメリカのローカルメディアの衰退と UCIMC のようなハイパーローカルなメディア活動の展開を、地域の状況をふまえて次のようにわかりやすく説明している。

「2011年連邦通信委員会のレポートではインターネットのような『新しいメディア』の出現の影響に重点が置かれているようにも感じられますが、アメリカにおける『ローカルメディア』(大きめの町ひとつ、あるいは小さな町いくつかをマーケットとする新聞社、ラジオ局、テレビ局など)の衰退は、商業メディアのモノポリー化(大きな経営規模を持つメディア会社による市場の寡占)とも切っても切れない関係にあります。『ハイパーローカルなメディア』は、アメリカでは、そのようなモノポリーのメディア企業の全国進出によって生まれた『ローカルメディアの空洞化』に対抗するようにして活性化してきた、ということもできるかもしれません。もちろんインターネットや SNS の発達もたらした影響というのは大きいと思いますが。

似たような状況は、全国チェーンのスーパーマーケットやショッピングモールの地方進出とローカルビジネスの衰退、それに対抗した「地元経済」を守ろうとする運動(アーバナ・シャンペーンでいえば、Harukana Show でたびたび言及しているファーマーズ・マーケットやホリデー・マーケットもその一例だと思います)の発展と重なる部分もあるように感じます。そして、メディア産業の構造や状況は日本とアメリカでは異なっていますが、大規模商業施設と地域の商店街の関係などは、両国に共通した部分もありそうです。そんな視点から見ると、日本でも商店街活性化の試みに『ハイパーローカルなメディア』を取り込もうとする動きがあるのは興味深いことだと思います」(Harukana Show Podcast No. 89)。

小牧氏が述べているように、アーバナのダウンタウンは、全国チェーンの大手のスーパーマーケットやショッピングモールが近郊に進出し、ローカルビジネスが衰退するなかで、地元アーティストのギャラリーや小物販売店、服飾店、靴屋、フラワーアート・ショップ、古本屋、健康食品店、ベーカリー、ライブハウス、バー、エスニック料理店など、こだわりの自営店が集まって現在の商店街を形成している。ショッピングモール

の建物内は、普段は人気は少ないが、Co-op Food やアートショップがあり、ホールでは、ハンドクラフトのマーケットや地域のイベント会場にも利用されている。5月から10月は、毎週土曜日には、屋外の駐車場でファーマーズ・マーケットが開催され多くの人々にぎわう。アーバナのダウンタウンはある意味では文化的に特化され、自身のライフスタイルを意識して考える人々にとっては集まりやすい場所になっている。UCIMC は、そんな街の中心に場所を得て存在している。

UCIMC には、2011年はのべ25万人あまりが訪れているが、私が見る限りでは、利用者層は広くない。たとえば、アーバナの人口（2010年）の17.8%を占めるアジア系の人々を、UCIMC で見かけることは稀である。多数の団体が UCIMC を拠点として活動し、ネットワークがつくられていても、そこから発信される情報や関係者の網の目に接する機会がない人々にとっては、重厚な建物から受ける印象も影響してか、UCIMC はどこか近寄り難い。地域の人々に開かれながらも、関係者のこだわりや熱意やポリシーが UCIMC の目に見えない敷居を高くし、利用者層を狭めている場合もあるだろう。

ハイパーローカルなメディアの発信が、ロングテール理論のニッチ商品のように、インターネットを通して同様の関心をもつ人々のあいだで知られることにより、地域をこえたネットワークをつくることは可能である。しかし、WRFU やその番組が、アメリカにおいて「知る人ぞ知る」放送局や番組となったとしても、アーバナ・シャンペーンの多くの住民には知られていない、という事態はじゅうぶんにありうる。そもそも UCIMC や WRFU の活動は、地域を広くきめ細やかにカバーした情報を届け、地域活性化や住民意識形成をはかるような、地域密着型のメディアではない。UCIMC は、多様な団体、活動の拠点となり、マスメディアや行政が扱わないような問題を掘り起こし、マイノリティの立場にある人々の主張や活動を掘り上げ、地域を舞台にしたイベントを重ね、ネットワークをつくっていく。

コミュニティラジオとしての WRFU も、各番組の趣旨や対象となる集団やカテゴリーやテーマに関して地域とのつながりをもつが、地域全体や居住区などローカルなコミュニティへの一般的な関心は薄い。アーバナ・シャンペーンは、イリノイ大学を中心にした大学街であり、学生、研究者は、人生のキャリアの何年間かをここで過ごし、他地へ移っていく場合が多い。毎

年、各学期、一定割合の人口が入れ替わる。そこでは、新しい人を取り込み、状況におうじて人とのつながりを機能させる動的な仕組みが重要になる。

UCIMC がいう「メディアになる」とは、情報発信装置を利用することで、その問題に関わる人や集団のつながり方、情報の伝い方を意識し、目的に応じて異なるメディアを作動させ組み合わせる感覚を身につけていくことではないかと思う。コミュニティ・メディアは、メディアが人をつなぐのではなく、人がメディアを使い地域での関係をつなぎ、活動を作っていく。小さなメディアから発するさまざまな声が、限られた人に届き誰かを動かすこともあれば、発話者の意図とは別に、場所をこえたより多くの他者によって見いだされ、広域のつながりが生まれることも可能である。

本論文では、低出力コミュニティラジオ局におけるメディア実践をとおして、WRFU や UCIMC の活動をその内部から観察してきた。今後はアーバナ・シャンペーンにおける他のメディアと地域との関係についても調べていきたい。アーバナ・シャンペーンでは、大学のメディア学部が関わるパブリック・メディアの放送局 WILL がある。ここでのパブリック・ラジオ（ラジオ、テレビ、オンライン放送）は、大学のメディア教育を組み込み、全国ネットワークである NPR (National Public Radio) プログラムをカバーする一方で地域とも連携している。イリノイ大学のキャンパスには、視力に障がいをもつ人々を対象とした放送局 Illinois Radio Reader もある。そして本稿でもふれたようにシャンペーンのダウンタウンには大きなコミュニティラジオ局 WEFT がある。これらのラジオ局は、地域と関わりをもちながら、より専門的な番組制作を行っている。

これにたいして、WRFU では、住民が暮らしの合間のわずかな時間にスタジオに大急ぎで滑り込み、その場で、素手で作るような番組が放送される。なぜ、いま、そのような小さなラジオ局が、アーバナ・シャンペーンだけでなく全米に存在し、地域の人々からどのように求められているのか。都市部を含む全米に、これからさらに多くの低出力ラジオ局が開局し、どのように展開していくのか。今後の動向を注視していきたい。

また、アーバナ・シャンペーンにおいて、行政とイリノイ大学による地域のブロードバンド推進プロジェクト (UC2B: Urbana-Champaign Big Broadband) が、実現すれば、学校、図書館やコミュニティ・センターなど公共の施設において、より多くの住民が経済的負

担をおわずに高速、大容量の情報通信を利用することが可能となる。UCIMC も、UC2B の基点の1つとなっている。UCIMC の情報通信環境が整備されると同時に、おそらく WRFU でもインターネットラジオ放送が始まるであろう。ラジオの生放送がインターネットで同時に配信され、世界中からこれを聴くことができる。ここでも再び、地域に拠点をもつコミュニティラジオの意味が問われる。ハイパーローカルなメディアがグローバルにつながり、Harukana Show のような多文化接触のメディア空間が、これからどのように展開するのか。小さなメディアを利用した人と情報と地域内外のつながりが、いかなる状況で機能し展開するのか、WRFU でのメディア実践と現地調査をとおして見ていきたい。

#### 注

- 1) U. S. Census Bureau, 2010 Demographic Profile Data によると、Urbana city は、総人口は41,250人である。One Race 39,975人 (96.9%) のうち、White 24,902人 (同市の総人口の60.4%)、Black or African American 6,726人 (16.3%)、American Indian and Alaska Native 111人 (0.1%)、Asian 7,328人 (17.8%)、Native Hawaiian and Other Pacific Islander 58人 (0.1%)、その他850人 (2.1%)、Two or More Race が1,275人 (3.1%) である。アジア系7328人のうち、Asian Indian 1,229人 (3.0%)、Chinese 3,299人 (8.0%)、Filipino 225人 (0.5%)、Japanese 158人 (0.4%)、Korean 1,542人 (3.7%)、Vietnamese 179人 (0.4%)、Other Asian 696人 (1.7%) である。  
同じく Champaign city の総人口は81,055人である。Race 別人口は、One Race 78,630人 (97.0%) のうち、White 54,918人 (同市の総人口の67.8%)、Black or African American 12,680人 (15.6%)、American Indian and Alaska Native 205人 (0.3%)、Asian 2162人 (2.7%)、Native Hawaiian and Other Pacific Islander 58人 (0.1%)、その他2,203人 (2.7%)、Two or More Race が2,425人 (3.0%)。アジア系2162人のうち、Asian Indian 2,162人 (2.7%)、Chinese 2,312人 (2.9%)、Filipino 572人 (0.7%)、Japanese 214人 (0.3%)、Korean 1,930人 (2.4%)、Vietnamese 618人 (0.8%)、Other Asian 758人 (0.9%) である。なお、2市を合わせて Urbana-Champaign と呼ぶ場合と Champaign-Urbana と呼ぶ場合がある。その個人や団体が、どちらを生活、活動の拠点としているかによることが多い。
- 2) UIUC On-Campus Student Enrollment by Curriculum and Student Level, Fall 2010 (Website-UIUC Student Enrollment). なお、2012年秋学期は、イリノイ大学登録者数42,883人のうち留学生 (International) は8,648人、このうち日本人は69人 (学部、大学院、研究者を含む) である (UIUC Student Enrollment)。大学への登録者数は、各期のみ短期在籍者も含み、その全てが住民人口として数えられるわけではない。
- 3) 2005年から2009年にかけて、新聞広告収入は47%減少、日刊紙のスタッフは2006年から4分の1以上人員削減がすすんでいる。(Waldman 2011: 10)
- 4) PEW Research Center Study の調査によると、1991年の54%から、2010年には34%と大きく減少している (Waldman 2011: 61-62)。
- 5) “Network Radio Reaches Over 181 Million Persons 12 and Older On a Weekly Basis”, Arbitron RADAR (Radio’s All Dimension Audience Research), December 2012
- 6) 連邦通信委員会が公認したカテゴリーとして低出力ラジオを Low Power FM とよび、非合法的なラジオ活動 (pirate radio) は、micro radio, microbroadcasting と呼ばれることが多い。アメリカの micro radio 運動、media activist の活動、理論が、連邦通信委員会の LPFM にたいする方針をどのように動かしてきたかについては、Opel (2004) が詳しい。
- 7) “Low Power FM Broadcast Radio Stations (LPFM)” in the FCC Encyclopedia
- 8) “Broadcast Station Total as of June 20, 2012” (FCC News, July 19, 2012) によるとフルパワー・ラジオ局は計15,082、うち AM 局4754、FM (商業) 6568、FM (教育) 3760。
- 9) WRFU は、関係者のあいだでは、ラジオ・フリー・アーバナよりも、アルファベットをそのまま読み、ダブル・アール・エフ・ユー、UCIMC は、アイ・エム・シーと呼ぶことが多い。本稿では、WRFU および UCIMC と記す。
- 10) UCIMC のモデルとなっているのは、1999年にシアトルの世界貿易機関 (WTO) 閣僚会議開催中に、オルタナティブな報道機関として設立された Independent Media Center である。シアトルの IMC のモデルは全米内や海外にも普及し、それらが website を開設してつながり、Indymedia ネットワークを形成している。(ウォルツ 2008: 231-235) 1999年にアーバナ・キャンペーンからシアトルでの抗議運動に参加した人々が中心となり、2000年に UCIMC を設立した。
- 11) 2012年までは、WRFU は、UCIMC の活動プロジェクトであるが財政的には独立していた。2013年より、財政的にも UCIMC に組み込まれることになり、スタジオ賃貸料1600ドル (年間) は、免除されることになった。
- 12) UCIMC に加入 (年会費50ドル~) し、WRFU プロジェクトにメンバーとして登録 (年会費25ドル~) すれば、番組担当を申し出ることができる。申請は WRFU の集会で審議され、曜日、時間帯などの調整を行い、ラジオ番組制作の心得と技術的なトレーニングを受けたうえで、新番組を開始することができる。各番組は、Host (責任者) と Co-host (副責任者) の計2名以上の登録が必要である。
- 13) 2011年は、UCIMC 職員は2.25人、運営委員16人、数百人のボランティアに、425組織が関わり、利用者は256,198人であった。“Fund-raising Committee of the UCIMC Board, September 15, 2012” 2012年12月



UCIMC 運営委員会配布資料より)

- 14) “Host your event at the Urbana-Champaign Independent Media Center” (UCIMC フライヤー, 2012) によると, UCIMC 1 階の The Sun Room (2300 square feet), The Main Space (2500 square feet) の賃貸料は, UCIMC の会員は, 1 時間30ドル, 1 日300ドル, 両スペースを借りる場合は45ドル/時間, 450ドル/日, 非会員は, 40ドル/時間, 400ドル/日, 両スペースは60ドル/時間, 600ドル/日, である。
- 15) Bike Project (自転車リサイクル運動), School Designing a Society (社会をデザインする議論と活動), Uniting Pride of Champaign County (LGBTQQA の権利などについての活動) なども, 協賛団体として UCIMC にオフィスを借りている。(UCIMC フライヤー, 2012)
- 16) 2011年には, UCIMC では153のイベントが開催された。Zine Fest, Prisoner Arts Festival, Maker Fair, IMC Music Fest, など (UCIMC Highlights, 2012年12月)。2012年には, 本稿 3-1 でも言及する Grassroots Radio Conference が UCIMC で開催された。
- 17) アーバナ・シャンペーンの 2 市の総人口122,305人 (2010年) のうち日本人数は, 372人, わずか0.3% である。
- 18) 実際に番組を開始すると, WRFU のスタジオ外での番組の宣伝や取材をとおして, 多くの協力者と出会い, イリノイ大学や地域の人々に関わる機会をえた。コミュニティラジオでの日本語番組開始を知ってもらうために, イリノイ大学での日本文化に関する講義や日本語を学ぶ学生の集まり, 大学のアジア関係の諸機関を訪問し, コミュニティラジオからの新しい日本語番組について説明した。イリノイ大学日本人会のメーリングリストに, 番組について告知した。WRFU, UCIMC のメンバーに協力を求め, 人を紹介してもらい取材にでかけた。「WRFU の Harukana Show」という名目があると, 初対面の人も話がしやすく, 出演をお願いすると, どの人も快くスタジオに来て, 日本語や英語で話してくれた (西川 2012)。
- 19) WRFU の他の番組の制作方法はさまざまである。レギュラーメンバー間のトークと音楽, スタジオにしばしばゲストを招く, 取材して録音編集した音声を番組で流す, スタジオと外部を電話やスカイプでつないでトークをしていく場合もある。子供が出演する番組は, スタジオ以外の場所で先に収録する場合が多い。自宅にスタジオを作り, インターネットで映像と音声の配信ができるようにし, ここから WRFU のスタジオと接続してラジオ放送し, ユーストリーム配信をする, といった番組もある。
- 20) 辻野氏は, 神戸市東灘区を拠点とする「ひがしなだコミュニティメディア」について, たとえば「つなみ (到達予測) ラインウォーク」(2012年3月11日開催) などの地域イベントや, 地域的话题をユーストリームを使って定期配信していく「Media Rocco」の活動 (2012年10月開始), あるいは市民メディア全国集会 (2012年10月27日, 28日開催) に参加しその様子を Harukana Show でレポートした。立石氏は, 近年日本でも若い人々に人気の Zine について, 自身の制作活動の展開や日本でのブーム, 「カフェ放送でれれ」などの市民メディア活動について紹介した。私は, 神戸市長田区の多言語・多文化放送局 FM わいわいや兵庫県西宮市の FM さくらを取材したり, ドキュメンタリー映画『ブラジルから来たおじいちゃん (A Grandpa from Brazil)』(2008) の栗原奈名子監督へのインタビューなどを, 番組で紹介している。また筆者の勤務校である甲南大学の大学院生や学部生からしばしば協力をえている。大学院生の入江由規氏には, 番組のなかでアニメの「聖地巡礼」について語ってもらった。学部学生が制作したサウンドメッセージ (解説つき音声) を「西宮十日戎」「米研ぎの音」「車内放送」などを番組で紹介した。「紅白歌合戦」「新年の巫女さんアルバイト」などをテーマとした学生による座談会を収録して, 番組で流したこともある (論文末表 1 Harukana Show Podcast No. 43-93 参照)。
- 21) 新サイト制作にあたっては, 甲南大学地域連携センター (KOREC) の高木昌要氏や, Konan Navi (学生による大学生活に関する情報提供や甲南大学出身者との交流サイト) を運営する寺本憲人氏からの協力を得た。新サイトに関しては, アクセス件数, 場所などを知ることができるようになった。データがある程度蓄積した時点で分析したい。
- 22) Harukana Show の出演者のあいだでも, 言語, 季節や暮らし, 社会の状況を必ずしも共有しておらず, トークのなかでも, さまざまな「ずれ」が生ずる。多文化が接触するメディアスペースについては, 西川 2013参照。
- 23) 7月27日の GRC セッションでは, 西川は米日をオンラインでつないだトークショー, Harukana Show について話した。Garza 氏は, WRFU において自ら担当する Native American についてのラジオ番組, 11<sup>th</sup> Indian について, そして辻野氏は, 日本から Skype でセッションに参加し, パソコンと接続した会場のテレビ画面から, 神戸の「ひがしなだコミュニティメディア」の活動について報告した。また, 小牧氏は, 会場での写真撮影や会場からの質疑応答に加わった。このセッションの様子は, 短い動画にまとめ, Youtube にアップロードしている。(http://www.youtube.com/watch?v=BD2FWRuKJys) また, 発表や質疑応答の内容については, 同日の Harukana Show で, スタジオからも報告し, 当日の発表スライドの PDF とともに, Podcast に詳細を掲載している。(Harukana Show Podcat No. 70 July 27, 2012 「グラスルーツ・ラジオ集会報告, Community Radio をグローバルに開く」, 参照)
- 24) Chynoweth 氏は, 2007年に, Champaign-Urbana Cable and Telecommunications Commission 設立に参加, その後, 行政と大学の共同プロジェクト Champaign-Urbana Big Broadband Project (CU2B) へと展開し, 地域の公的なブロードバンドサービスの実現を進めている。Chynoweth 氏は, 2011年の Central Illinois Busi-

ness Magazine の40歳未満の“Women of the Year”に選ばれている。当時39歳である。

- 25) WEFT90.1FM は、1975年より有志が集まり活動を開始、資金を募り、1981年11月26日から放送開始、当時は1000ワット未満の出力だが、現在は、100,00ワットの出力をもつコミュニティラジオ局であり、イリノイ州の中東部の複数の郡 (county) をカバーする。(“History of WEFT”, WEFT の Website より)
- 26) Triple R の意味は、スペイン語表記では、El Ritmo y Resistencia de la Raza、英語では、Rhythm and Resistance for the People (字義通りには Race) である。
- 27) 2010年人口統計では、Hispanic or Latino は、アーバナでは2,165人 (市内人口の5.2%)、シャンペーンでは5,111人 (6.3%) である。
- 28) 米国移民帰化局のホームページ内の DACA に関するガイダンスによると、申請には次の条件を全て満たす必要がある。「1. 2012年6月15日時点で31歳未満のもの、2. 16歳の誕生日を迎えるまでにアメリカ合衆国に入学し、3. 2007年6月15日から現在まで継続してアメリカに滞在している、4. 2012年6月15日時点、かつ米国移民局へ DACA 申請書類提出時に合衆国に滞在している、5. 2012年6月15日より前に合衆国に不法入国した、もしくは合法的滞在資格が2012年6月15日時点で失効している、6. 現在通学している、高校を卒業した、GED (General Education Development) 証書を取得した、もしくは米国沿岸警備隊や軍隊を円満退役した、7. 重罪、重大な軽罪、3つ以上の軽罪で有罪判決を受けたことはなく、もしくは国家安全、公共の安全を脅かすものではない。」“Consideration of Deferred Action for Childhood Arrival Process” in USCIS website
- DACA 申請相談のボランティアは、相談に訪れた住民に申請条件を説明し、要件を満たしているかなどをともに確認する。申請に際しても、複数の証明書をそろえ、申請諸フォームに正確に記入しなければならない。一連の手続きを理解するには、相当の学習が必要となる。また、相談員も、一般的な窓口としての相談と、個別の問題に対応する法律などの専門家などに分けて、それぞれの役割を担う。政府による告知、説明書、書類を読み煩雑な手続きを全て理解するのは容易ではなく、移民フォーラムが開催するような無料で参加できる DACA の説明、相談イベントなどによる支援が必要となる。
- 29) トークの音声、内容、解説は、89回 Podcast に掲載している。「Harukana Show Podcast: No. 89 December 7, 2012 Harukana Show 年末座談会 “Hyperlocal”」<http://harukanashow.org/archives/933>, 参照
- 30) ヒット商品を大量販売する商法では在庫処理されていたような需要の低い商品が、オンラインビジネスによって Web 上での低コストの在庫管理と検索が可能となり、ニッチ商品の多品種少量販売が大きな収益をあげることが可能となった (アンダーソン 2009)。
- 31) たとえば、同人誌、ミニコミ誌はかつて存在し、限られた人々のあいだで流通していたが、現在は、少

部数の手作り小冊子、おしゃれな Zine がインターネットの検索エンジンにかかることで、個人の作品が、場合によっては多くの人々にたちまち注目され、雑誌で紹介されたりする。

- 32) Harukana Show Podcast: No. 47-1 Feb.17, 2012 「神戸市東灘区岡本商店街とソーシャルメディア with Matsuda」, 参照。

#### 参考文献・資料

##### 文献

- アンダーソン, クリス  
 ・2009 [2006] 『ロングテール [アップデート版]』篠森ゆりこ訳, 早川書房  
 ・2012 [2012] 『メイカーズ: 21世紀の産業革命が始まる』関美和訳, NHK 出版
- Chynoweth, Danielle  
 ・2009, “Make More Local Radio!” *Public i*, November 2009, Vol. 9, No. 9 p. 3  
 ・2011, “Thousands of New Community Radio Stations on the Horizon with the Historic Passage of the Local Community Radio Act”, *Public i*, January 2011, Vol. 11, No. 1, p. 1  
 ・2013, “WRFU Raises Tower... Now Roaching Entire Community”, *Public i*, Winter 2013, p. 2
- Jody, Losias ed.  
 ・2012, *Prometheus radio project v. FCC: Prometheus Radio project*, Federal Communications Commission, Anthony Joseph Scirica, Telecommunication Act of 1996, Cred Press
- 西川麦子  
 ・2012, 「コミュニティラジオをグローバルに開く～アメリカ、イリノイ州、WRFU-LP の日本語番組の試み」『甲南大学紀要文学編』No. 162, pp. 51-68  
 ・2013 「多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから」『世界思想』40号, 世界思想社, pp. 18-21
- Opel, Andy  
 ・2004, *Micro Radio and the FCC: Media Activism and the Struggle over Broadcast Policy*, Praeger
- Riismandel, Paul  
 ・2004, “Thank the Pirates for Radio Free Urbana”, *Public i*, May 2004, Vol. 4, No. 4, p. 1
- Ruby, Christabel Donatienne ed.  
 ・2012, *Local Community Radio Act: Broadcast Law, Low-Power Broadcasting, FM Broadcasting, Equal Protection Clause*, FIDE
- シャーキー, クレー  
 ・2010 [2008], 『みんな集まれ! ネットワークが世界を動かす』岩下慶一訳, 筑摩書房
- Safronova, Tatyana  
 ・2011, “Bigger is Better! Help WRFU Erect Epic Radio Tower” *Public i*, February 2011, Vol. 11, No. 2, p. 1  
 ・2011, “WRFU Tower is Approved” *Public i*, April 2011, Vol. 11, No. 4, p. 1

Walker, Jesse

- ・ 2001, *Rebels on the Air: an Alternative History of Radio in America*, New York University Press

ウォルツ, ミッチ

- ・ 2008 [2005], 『オルタナティブ・メディア—変革のための市民メディア入門』 神保哲生訳・解説, 大月書店
- ワッツ, ダンカン
- ・ 2004 [2003], 『スモールワールド・ネットワーク—世界を知るための新科学的思考』 辻竜平, 友知政樹訳, 阪急コミュニケーションズ

#### 参考資料 (電子版)

Arbitron Inc.

- ・ “Network Radio Reaches Over 181 Million Persons 12 and Older On a Weekly Basis”, Arbitron RADAR (Radio’s All Dimension Audience Research), December 10, 2012  
: <http://arbitron.mediaroom.com/index.php?s=43&item=850>

Federal Communications Commission (FCC)

- ・ “Broadcast Station Totals as of June30, 2012”, [http://transition.fcc.gov/Daily\\_Releases/Daily\\_Business/2012/db0719/DOC-315231A1.pdf](http://transition.fcc.gov/Daily_Releases/Daily_Business/2012/db0719/DOC-315231A1.pdf)
- ・ “Fifth Order on Reconsideration and Sixth Report and Order (FCC12-144), released December4, 2012”, <http://www.fcc.gov/document/lpfm-fifth-order-reconsideration-and-sixth-report-and-order>
- ・ “Low Power FM Broadcast Radio Stations (LPFM)” in the FCC Encyclopedia, <http://www.fcc.gov/encyclopedia/low-power-fm-broadcast-radio-stations-lpfm>

Dunbar-Hester, Christina

- ・ “The History and Future of Hyper-Local Radio”, *The Atlantic*, October 5 2010, <http://www.theatlantic.com/technology/archive/2010/10/the-history-and-future-of-hyper-local-radio/64058/>

News Gazette

- ・ “Getting Personal: Danielle Chynoweth”, November 19, 2011, <http://www.news-gazette.com/news/business/miscellaneous/2011-11-19/getting-personal-danielle-chynoweth.html>

Merli, Melissa

- ・ “Melissa Merli’s Art Beat: New Tower Extends Radio Station’s Reach”, News-Gazette.com, 8:00 am, January 6, 2013, <http://www.news-gazette.com/news/arts-and-entertainment/art/2013-01-06/melissa-merlis-art-beat-new-tower-extends-radio-stations->

大蔵昌枝

- ・ 2012, 「移民法・雇用法ニュース DACA 若者の国外退去処分延期措置」(J-News, 2012年9月27日発行第143号掲載), <http://jnewsusa.com/law/index.html>

University of Illinois at Urbana-Champaign (UIUC)

- ・ UIUC Student Enrollment (Last Updated: 2/15/2013),

<http://www.dmi.illinois.edu/stuenr/#historical>

U. S. Census Bureau

- ・ “2010 Demographic Profile Data: Urbana, IL”, <http://urbanaininois.us/sites/default/files/attachments/2010-urbana-dp1-table.pdf>
- ・ “2010 Demographic Profile Data: Champaign, IL”, [http://ci.champaign.il.us/cms/wp-content/uploads/2012/02/2010-Census-General-Profile\\_Champaign.pdf](http://ci.champaign.il.us/cms/wp-content/uploads/2012/02/2010-Census-General-Profile_Champaign.pdf)

U. S. Citizenship and Immigration Services (USCIS)

- ・ Consideration of Deferred Action for Childhood Arrivals Process: <http://www.uscis.gov/portal/site/uscis/menuitem.eb1d4c2a3e5b9ac89243c6a7543f6d1a/?vgnextoid=f2ef2f19470f7310VgnVCM100000082ca60aRCRD&vgnnextchannel=f2ef2f19470f7310VgnVCM100000082ca60aRCRD>

Waldman, Steven and Working Group on Information Needs of Communities

- ・ 2011, *The Information Needs of Community: The Changing Media Landscape in a Broadband Age*, Federal Communications Commission, July 2011, [www.fcc.gov/infoneedsreport](http://www.fcc.gov/infoneedsreport)

#### その他の資料

UCIMC

- ・ “Fund-raising Committee of the UCIMC Board September15, 2012”, 2012年12月 UCIMC 運営委員会配布資料
- ・ “Host your event at the Urbana-Champaign Independent Media Center” (UCIMC フライヤー, 2012)
- ・ “UCIMC Highlights” 2012年12月 UCIMC 運営委員会配布資料

#### 参照 URL

Champaign-Urban Immigration Forum:

<http://immigration-forum.blogspot.com/>

HOWE\*GTR: <http://howe-gtr.air-nifty.com/tamakichi/>

Illinois Radio Reader:

<http://will.illinois.edu/community/services/>

Independent Media Center:

<http://www.indymedia.org/en/index.shtml>

MEDIA ROCCO ひがしなだコミュニティメディア:

<http://mediarocco.jp/>

Prometheus Radio Project: <http://prometheusradio.org/>

UC2B: Urbana-Champaign Big Broadband: <http://uc2b.net/>

Urbana-Champaign Big Broadband Overview: [http://multi-](http://multi-media.illinois.edu/ng/J480fall2009/BroadbandInternet/)

[media.illinois.edu/ng/J480fall2009/BroadbandInternet/InternetAccess/UC2B\\_overview.html](http://multi-media.illinois.edu/ng/J480fall2009/BroadbandInternet/InternetAccess/UC2B_overview.html)

Urbana Champaign Independent Media Center:

<http://www.ucimc.org/>

WEFT: <http://weft.org/>

Will Radio. TV. Online: <http://will.illinois.edu/about/>

#### Harukana Show 関連

Harukana Show Website: <http://harukanashow.org/>



- ・ Podcast No. 47 Feb. 17, 2012 「神戸市東灘区岡本商店街とソーシャルメディア with Matsuda」
  - ・ Podcast No. 70 July 27, 2012 「GRC 報告, Community Radio をグローバルに開く」
  - ・ Podcast No. 73 August 17, 2012 「WRFU and 'Community' Radio in US with Daniell」
  - ・ Podcast No. 89 December 7, 2012 「Harukana Show 年末座談会 “Hyperlocal”」
- 動画 (Youtube)
- ・ “Harukana Show” (2012年3月制作, 4月15日公開), <http://www.youtube.com/watch?v=-rSSN4bgcds>
  - ・ “‘Radio Space’ a Presentation at the Grass Roots Radio Conference, 2012”. m4v (2012年8月制作, 9月5日公開), <http://www.youtube.com/watch?v=BD2FWRuKJys>  
(最終アクセス全て2013年1月8日)

表1 Harukana Show Podcast No. 43-95, 2012年1月20日～2013年1月18日

\*番組進行：Mugiko（西川，渡米期間以外は京都から出演，番組全体の進行，企画構成），WRFU スタジオスタッフ：Tom（Garza，エンジニア），Ryuta（小牧，ホスト），Tamaki（Levy，ホスト），毎回の放送は，この4人によって制作，進行。  
 \*Main Speaker 出演地：ゲストスピーカーと日本在住番組スタッフ Tsujino（辻野），Tateishi（立石）の出演場所，U-C：Urbana-Champaign（主に WRFU のスタジオからの生出演，他に事前収録を含む）。  
 \*Podcast No. 1—No. 42 については，西川（2012）に掲載  
 \*Harukan Show-Podcast: <http://harukanashow.org/archive/category/harukana-show-podcast>

No	Y/M/D	Podcast No.	内容	Main Speaker 出演地
43	120120	43	WRFU の Transmitter 故障，放送休止！田峯子供歌舞伎の舞台裏	
44	120127	44-1	WRFU-LP 放送再開！由紀さおり&ピンク・マルティーニ「1969」	
		44-2	Urbana-Champaign のイベント情報，必見!? PHD Movie	
45	120203	45-1	U-C で節分の豆まき（年齢+1），Groundhog Day	
		45-2	ロックが誘うヨーロッパの旅 with Tateishi	神戸
46	120210	46-1	友チョコ主流？日本のバレンタインデー	
		46-2	手頃な材料で和風を楽しむ！Tamaki のお料理教室 Appetizer～前菜，パーティ・ミール編	
		46-3	日本のアニメ大好き by Riki with Ryuta	
47	120217	47-1	神戸市東灘区岡本商店街とソーシャルメディア with Matsuda	神戸
		47-2	足下でつながる石畳の街 with Matsuda	
48	120224	48	Tamaki, Tsujino & Mugiko 3人娘の「思ひで」しっとりトーク	神戸
49	120302	49-1	Kyoto と U-C の春の始まり，映画「ミツバチの羽音と地球の回転」[エンディングノート]	
		49-2	Read Across America 絵本の読み聞かせイベント with Satomi	U-C
50	120309	50-1	東日本大震災から1年，多文化・多言語コミュニティ放送局：FM わいわい	
		50-2	大阪から UC-IMC へ，きれいで静かな場所，と思ったら，with Eunhwee	U-C
51	120316	51-1	U-C は初夏？沖縄の魅力 with Tamaki	
		51-2	卒業式の“衣装”，3.11 つなみラインウォークレポート with Tsujino	神戸
52	120323	52-1	桜開花情報，のほろが	
		52-2	Unity HS Musical “The Wiz” with Erika & Saiko	U-C
53	120330	53-1	Tamaki & Ruta の素敵なコンビトーク	
		53-2	御堂筋とイリノイ大学のトリビアな話，桜餅 with Tamaki & Ryuta	
54	120406	54-1	商社勤務から公園管理のお仕事，そしてモンタナへ，with Mayu	京都
		54-2	モンタナ，イエローストーン国立公園～自然の一員として with Mayu	
55	120413	55-1	情報&サービス満載(?)大阪地下鉄“車内放送” by Yuma & Aimi	神戸
		55-2	U-C の春のインディー系イベント with Ryuta & Tamaki	
56	120420	56-1	冷え冷え U-C からイベント情報，古本市，ジンフェス，イリノイマラソン	
		56-2	サッカーファンとして市民マラソンの応援を楽しんでみる(1) with Tateishi	京都
		56-3	サッカーファンとして市民マラソンの応援を楽しんでみる(2) with Tateishi	
57	120427	57-1	試験前だけど，イベントはメジロ押し	
		57-2	Potluck Party って何？With Shuta & Tamaki	U-C
58	120504	58-1	卒業式！ガウンと角帽と感謝 with Brian & Ryuta	U-C
		58-2	日本でのホームステイで地震を体験，耐震工学の道へ with Brian	
59	120511	59-1	Tamaki-san の Farmers Market Report	
		59-2	Akira-san のアメリカ物語～神戸からメンフィス，そしてイリノイへ	U-C
		59-3	Akira 風お好み焼きの秘技と江戸のブランド食	
60	120518	60-1	キャンパスは夏休みへ，U-C の街のイベントは多彩に	
		60-2	神戸・長田 FM わいわい・金千秋さんに聞く(1)阪神淡路大震災の経験から～災害と情報，メディア	神戸
		60-3	神戸・長田 FM わいわい・金千秋さんに聞く(2)震災と情報，メディア，多文化多言語放送局の誕生	
61	120525	61-1	金環日食を逃した Mugiko，スナッピーなお話 with Tamaki	
		61-2	神戸・長田 FM わいわい・金千秋さんに聞く(3)地域の多様な人々をつなぐ，参加型，多文化・多言語放送	神戸
62	120601	62-1	通天閣，3代目 Billiken-san が金髪に，イリノイよりも大阪で健在	
		62-2	お土産どうしよう with Mike	U-C
63	120608	63-1	大飯原発再稼働!? イベント情報 in Chicago	
		63-2	Tsujino のマイブーム，夏なのに甘酒	神戸
64	120615	64-1	「聖地巡礼」の世界へようこそ(前半) with Yoshinori	神戸
		64-2	「聖地巡礼」の世界へようこそ(後半) with Yoshinori	
65	120622	65	塩麴～本格的な隠し味，まろやかなコク with 神戸の Sayuri	神戸
66	120629	66-1	Euro な6月～欧州選手権と「ニュース速報」 with Tateishi	京都
		66-2	「カフェ放送でれれ」と市民メディア with Tateishi	
67	120706	67-1	国会事故調整委員会報告，酷暑のイリノイも節電	
		67-2	アメリカで典型的な BBQ とは？	
68	120713	68-1	官邸前反原発デモの警備強化，祇園祭	
		68-2	Grassroots Radio Conference が開催されます！	神戸

No	Y/M/D	Podcast No	内容	Main Speaker 出演地
69	120720	69-1	PECHAKUCHA NIGHT は英製和語? GRC もお忘れなく!	京都
		69-2	Tateishi 最新フリベ! 『HOWE』 vol. 21 「私はこういうことだってパンクだと思っている」	
		69-3	Twitter を読み流す, 「拡散」と情報のセレクトシヨップ化 with Tateishi	
70	1200727	70-1	State Fair でご当地の味発見	
		70-2	GRC 報告, コミュニティラジオをグローバルに開く可能性	
		70-3	災害とコミュニティラジオ	
71	120803	71-1	UC 情報, Toshiko 紹介	東京
		71-2	東京ローカル, コインロッカーに新鮮野菜 with Toshiko	
72	120810	72-1	日本庭園の夏祭り with Lindsey	U-C
		72-2	Sound Message 「米を研ぐ音」 by Asako, from Kobe	神戸
		72-3	9月からシカゴへ半年滞在, 衣替えの準備は?	
73	120817	73-1	WRFU and 'Community' Radio in US with Danielle (In English)	U-C
		73-2	WRFU and 'Community' Radio in US with Danielle (Traslation by Ryuta)	
74	120823	74-1	キャンパス周辺のリユースなイベント	
		74-2	住宅街でもさまざまなセール	
75	120930	75-1	大雨警報の Labor Day, 水羊羹レシピ	
		75-2	PACAって? 何が再利用できるか, するかは, その人が決める with Tom	
76	120907	76-1	UC イベント情報	
		76-2	アメリカな結婚式? 招待状が届いたら with Tamaki	
77	120913	77-1	移動とつながり (前半) with Kurihara 監督	京都
		77-2	移動とつながり (後半) with Kurihara 監督	
78	120920	78-1	ハロウィンの準備の季節です	
		78-2	秋の夜長に読書~ブラジルと日本の移民の歴史, 在日日系ブラジル人関連, 入門編	
79	120927	79-1	中秋の名月の月餅, 食欲の秋, 芸術の秋, 読書の秋	東京
		79-2	小学校の地域への開放~東京都練馬区の場合 with Toshiko	
80	121005	80-1	読書の秋, 食欲の秋, そして映画も泣いて笑って美味しく	神戸
		80-2	MEDIA ROCCO INTERNET COMMUNICATIONS (MRIC) with Tsujino	
81	121012	81-1	Tamaki-san の秋のお菓子, あつあつ「どら焼き」, 杜の街 Urbana のスマイル通貨	
		81-2	西宮市のさくら FM と WRFU スタジオ	
82	121019	82-1	Riki の夏の思い出~日本で Billy Joel な話題	U-C
		82-2	U-C イベント情報~もうすぐハロウィン	
83	121027	83-1	日本で洒落なZineブーム, 原点は「手作り感」 with Tateishi	京都
		83-2	ミシマ社, という出版社~「原点回帰」の実験的精神 with Tateishi	
84	121102	84-1	Folk&Roots Festival, にんにくとショウガたっぷりの唐揚げ	
		84-2	大阪のおしゃべりなビストロのカウンターで~フマスの話題	
85	121109	85-1	市民メディア全国交流会くびき野メディアフェス2012 with Tsujino	神戸
		85-2	UC イベント情報と WRFU の Tower レポート	
86	121116	86-1	日本のおいしいお米をめぐる列島激戦のお話	
		86-2	Champaign-Urbana's community magazine のフリーペーパー 「Buzz」	
		86-3	U-C イベント情報	
87	121123	87-1	「いい夫婦の日」(11月22日) にちなんだ話題ー「妻のへそくり127万円, 夫は38万円, 民間調べ」	U-C
		87-2	子供と楽しむ U-C 年末イベント情報&Japan Café	
		87-3	Washitake さんを囲んで (IIA の活動, イリノイ大学の MBA, 気象庁でのお仕事, 天文部,)	
89	121207	89-1	U-C イベント情報	神戸
		89-2	Harukana Show 年末座談会 (前半) Hyperlocal Media とプリン騒動	
		89-3	Harukana Show 年末座談会 (後半) Hyperlocal Media と「商店街」な関係	
90	121214	90-1	祝新タワーなど U-C 情報	神戸
		90-2	第63回紅白歌合戦初出場歌手をめぐるトーク (紅組編) with 甲南大学生 6 人	
91	121221	91	第63回紅白歌合戦初出場歌手をめぐるトーク (白組編) with 甲南大学生 6 人	
92	121228	92-1	年末年始の過ごした方@UC	京都
		92-2	ローリングピアノマン, リクオトーク (前半)	
		92-3	ローリングピアノマン, リクオトーク (後半)	
93	130104	93-1	海外年賀状&ご当地お雑煮	U-C
		93-2	金融業から僧侶へ, 新春に縁あるお話 with Kokai	
94	130111	94-1	西宮十日戎 by Ryunosuke	神戸
		94-2	UC イベント情報&冬を温かく飲み物編	
95	130118	95-1	UC イベント情報&1・17, 大学入試センター試験など	神戸
		95-2	神社で巫女のアルバイト with Nishiki&Imari	